

大学生のコミュニケーション能力育成のための

臨床心理学的カリキュラムの開発

—教育系学部学生における集団討論における360度カメラによる行動変化の分析—

山本文枝（安田女子大学）西川ひろ子（安田女子大学）西まゆみ（安田女子大学）

Development of a Clinical Psychology Curriculum to Foster University Students' Communication Skills: Analysis of Behavior Change with a 360° Camera in Group Discussions among Faculty of Education Students

Fumie Yamamoto (Yasuda Women's University) · Hiroko Nishikawa (Yasuda Women's University) · Mayumi Nishi (Yasuda Women's University)

I. 研究目的

本研究は、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成するためのカリキュラムの開発を目的としている。特に、発達障がいによる二次障害の問題に配慮し、コミュニケーション・スキルに加え、自己概念の肯定的変化をねらう。今回は、集団討論後のフィードバック(以下、FB)が、その後の集団討論の行動にどのように影響するのかについて検討を行った。討論中の行動を360度カメラで撮影し、集団の中で自閉症スペクトラム指数が比較的高い学生の行動変化に注目して検討した。

これまでは、質問紙調査による分析を行ってきたが、360度カメラを用いた分析を行った。360度カメラを用いた先行研究では、宮崎ら(2019)は、360度カメラを用いた動画を新しい授業システムとして試作を提案している。また、徳原ら(2020)は「発言量の測定の既存研究には、ビデオカメラ、マイク、コーションセンサなどの複数のセンサを使用する手法が報告されている。その手法は多様なセンサを用意・装着しなければならず、手間と費用が大きいという問題がある。(略)360度カメラを用いた取得した動画から参加者の発話量の開口状態を推定することでグループミーティング時の発話量を推定する手法を提案」している。

本稿は、集団討論における集団内の発言時間や表情を同時並行に観察できる360度カメラを活用することによって参加者の行動の変化を表情や態度の観察によって要因分析を行うことを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

教育系学部に所属する女子大学生(3年生)39名。そのうち、質問紙データに欠損値のあった3名を除く36名を分析対象とした。平均年齢21歳であった。

2. 調査日時と集団討論のテーマ

第1回2019年3月13日、テーマ「地域と連携した防災の備えについて」

第2回2019年3月20日、テーマ「IT社会におけるコミュニケーションについて」

第3回2019年3月27日、テーマ「しつけと虐待について」

3. 集団討論の実施方法

7～8名ずつ5つの集団にランダムに割り当て、15分間の集団討論を週1回連続3週間、合計3回実施した。集団は、①教師によるポジティブFB(行動の良い部分を伝える)のみ、②教師によるポジティブFBと課題FB(行動の課題を伝える)、③FBなし(統制)、④学生相互によるポジティブFBのみ、⑤学生相互によるポジティブFBと課題FBの両方の5条件に割り当てた。

手続き 実験協力者は実験室に入室後、指定された席に座った。事前の質問紙調査を実施(1回目のみ)、討論テーマを説明後、自己他者評価シートを配布し、各自で討論時の望ましい行動ポイント10個を確認してもらった。その後、集団討論(15分)、FB時間(10分)、自己他者評価シートを記入、3回目は事後の質問紙調査を実施した。自己他者評価シートの評価項目をTable 1に示したように、「みんなの気持ちを引き立てるようにふるまう」「みんなの意見をまとめる」「相手の意見を聞いてか

ら発言する」「相手の意見に従う」「みんなに冷靜な態度で接する」「よく考えてから発言する」「うなずいたり、あいづちを打つ」「話をしていない人にふって、意見を求める」「自分の意見を言う」「相手の意見に対して質問をして、理解を深めようとする」の10項目である。自己他者評価シートは、集団討論後に記入するが、2回目以降の集団討論においては集団討論において評価される項目を把握したうえで参加するので、その点を心掛けながらエクササイズに参加することを期待し、3回実施した。また、360度カメラで測定する項目は、この10項目の中から「うなずいたり、あいづちを打つ」と「自分の意見を言う」の2項目を数値化した。

Table 1 集団討論後の自己他者評価シート項目

集団討論において、各メンバーは、次の項目の行動をしたと思いませんか。あてはまる項目に☑をします。
みんなの気持ちを引き立てるようにふるまう。
みんなの意見をまとめる。
相手の意見を聞いてから発言する。
相手の意見に従う。
みんなに冷靜な態度で接する。
よく考えてから発言する。
うなずいたり、あいづちを打つ。
話をしていない人にふって、意見を求める。
自分の意見を言う。
相手の意見に対して質問をして、理解を深めようとする。

質問紙の構成 ①自己概念の形容詞(榎本(2002)から抜粋)、②自閉症スペクトラム指数(以下、AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004) (②は事前のみ)、③ENDCOREs(藤本・大坊, 2007)、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)。

4. 360度カメラによる行動分析方法

360度カメラによって、集団討論の際のお互いの表情や発言を聞いている際の態度、また集団討論後の教師や学生によるPFや課題を聞いた後の行動変容も観察記

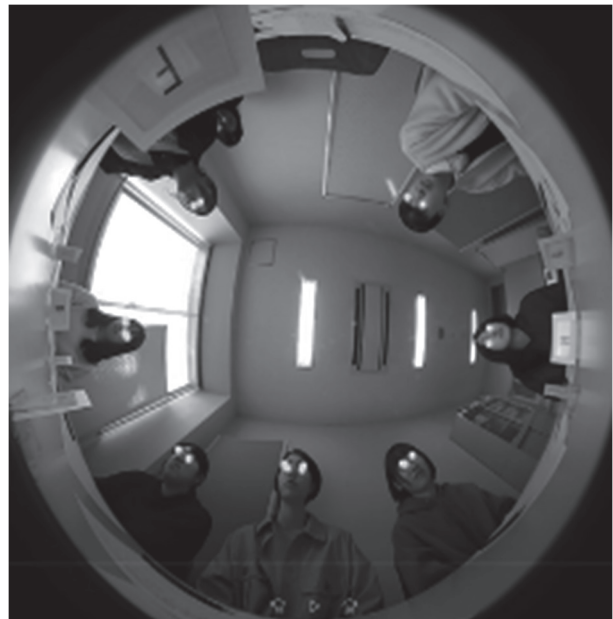


写真1 360度カメラで撮影した集団討論の画像の例

録し、分析対象とした。特にそれぞれの集団内におけるAQ値が高い協力者と行動モデルとなる可能性が高いAQ値が低い協力者の行動や態度を比較検討することも分析視点とした。

5. 360度カメラによる撮影

Kodak PIXPRO SP360を使用した。集団全員の表情やしぐさ、会話のやりとりの方向、発話時間等の観察を目的とした(写真1)。

6. 集団討論の実験の流れ

実験室に入室し、割り当てられたA~Hまでのアルファベットの席に着席した。事前質問紙実施(1回目のみ)、教示と討論テーマ説明、集団討論(15分間)、フィードバック、自己他者評価シートを記入、事後質問紙実施(3回目のみ)を行った。

7. 質問紙の内容

①自己概念の形容詞(榎本(2002)で用いられた形容詞45項目)から山本ら(2017)でAQ指数と有意な負の相関がみられたポジティブ形容詞6項目(おもしろい・意欲的・行動力のある・明るい・面度みがい・積極的)と有意な正の相関がみられネガティブ形容詞6項目(嫌といえない・ぎこちない・気が小さい・くよくよする・内気・おとなしい)の合計12項目、②自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)4件法に修正した50項目(1回目の

実施前事前調査のみ)、③コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORES(藤本・大坊, 2007)6 因子 24 項目、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)の自己受容討論を通しての気づきや感想など自由記述(3 回記事後調査のみ)、⑥集団討論後に毎回「自己他者評価ふりかえりシート」に記入。集団討論の様子を 360 度カメラで撮影を行った。

8. 倫理的配慮

質問紙および口頭で、記録に関する個人情報保護は保護され研究以外の目的では使用しないこと、参加は自由意思で中止できること、成績評価に一切関係しないことなどを伝え、同意した対象者が参加した。課題のみのフィードバック条件は設けなかった。

III. 研究結果と考察

1. 集団討論における効果と比較対象の視点

集団討論は①～⑤の条件を用いて検証を行った。その結果、最も自己肯定感の上昇がみられたのは、①教師によるポジティブ FB(行動の良い部分を伝える)のみであった。この条件に最も類似しているのは、②教師によるポジティブ FB と課題 FB(行動の課題を伝える)である。この二つの条件にどのような差があったのか。①と②の条件のそれぞれのグループ内で最も AQ が高い協力者を比較すると同じ AQ 値であった。そこで、この①②のグループ内の協力者の表情や態度や発話内容、AQ 値が高い二人の協力者の表情や態度や発話内容を比較検討した。

2. 集団討論参加者の態度と発言時間の比較

①・②条件の AQ が最も高かった協力者のうなづきの回数 (Figure 1)、発話時間(sec)を計測した (Figure 2) としていかに示した。①条件の 1 回目ポジ FB は「進んで司会や発言をした」、2 回目ポジ FB は「相手の発言を促した」であった。②条件の 1 回目ポジ FB は「うなづきをしていた」、課題 FB は「発言がなく聞くことのみだった」、2 回目ポジ FB は「相手の意見に同意していた。笑顔がよかった」、課題 FB は「自分自身の呼称について」であった。対象者・状況のベースラインは異なるが、どちらの条件においてもポジティブ FB がより行動の変化に影響を与えた可能性が推察された。

3. 比較対象者以外の集団討論参加者の態度や様子

①条件のグループでは、比較対象者が司会を率先して担当し、一人ずつに発言の順番を決めたりするなど集団討論においてパターンが見られた。また①条件のグループ内で AQ 値が最も低い数値の協力者は、うなづいたり積極的に笑顔で話しかけるなどの行動を行っており、AQ

値が高い対象者のモデルになっていた可能性も考えられた。

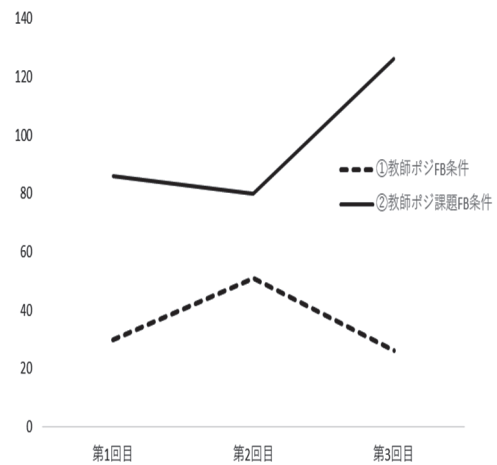


Figure1 教師によるポジティブフィードバックのみ条件とポジティブ・課題フィードバックの両方の条件における「うなづき」行動の回数。

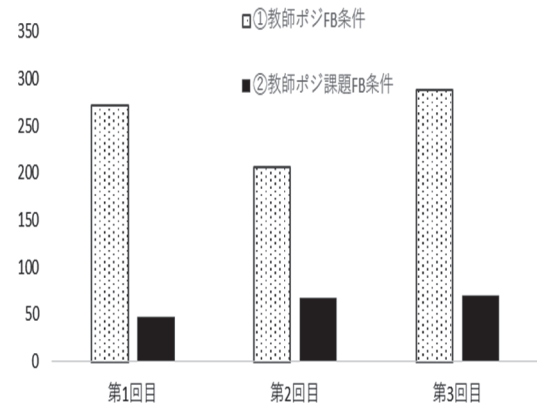


Figure2 教師によるポジティブフィードバックのみ条件とポジティブ・課題フィードバックの両方の条件における発話時間(sec)。

一方、②条件のグループは自由発言の形式をとっており、比較対象者が発言をするタイミングを見計らうなどが必要となった。さらに②条件のグループで AQ 値が低い協力者は、聞き上手といった態度をとり、タイミングよくうなづき、発言が途切れた際に笑顔で話を始めるといった姿が多々見られた。

それぞれのグループにおける構成メンバーの違いによる影響は少なからずあると考える。

また、集団討論における進行の仕方の差は今後の課題となるであろう。

4. 集団討論後の教師からのコメントの比較

①条件と②条件の比較対象者に対する教師からのコメントを以下の Table 2 にまとめた。教師からのコメントは①条件の方が短いこと、また②条件は発言が周囲の人がしやすい配慮や態度への評価は行っているが、一貫して発言数が少ないことを指摘していた。そのため、3回の集団討論で対象者は自分の成長を実感できなかったことが予想された。

Table 2 集団討論 教師のフィードバック内容

条件	第1回目	第2回目	第3回目
①教師によるポジティブフィードバックのみ	発言がない時に進んで発言しようとしたことが良かった。	相手の発言を促すような手を出して「いかかがですか」という仕草が良かった。	話題を出すために質問などを全体に投げかけたり、相手の意見をうなずいて聞くことが良かった。
②教師によるポジティブ+課題フィードバック	<ポジティブ>相手の話を聞いている時にうなずきをしたり、興味深い意見を述べたりしていたことは良かった。 <課題>課題は後半になると発言がなく、話を聞くことのみとなってしまうこと。	<ポジティブ>私も同じでといった発言があり、相手の意見を聞いていることを伝えていた。また、基本相手が話をしている時は笑顔であった。 <課題>気になったことは、第一人称を変更してはいかかだろうか。	<ポジティブ>うなずきをしっかりと聞き取りされていることが伝わりやすい、他の方が質問をされたときにすぐに反応されたことが良い、 <課題>課題は後半、発言がなかった。

5. 比較対象者の振り返りシート内容の分析

①条件と②条件の比較対象者の集団討論後における振り返りシートの自由記述を分析した。①条件と②条件の双方、集団討論の難しさを感じた感想を記していることは共通している。しかし、①条件は、「勉強になった」

と肯定的に捉えていることに対して、②条件は「自分が何を言おうか考えて」かった」と自己課題を再認識したという記述であった。AQの高い対象者にとっては、集団討論は他者との比較が明らかになる場であり、模擬体験としては適しているが、課題が明確になることによって自信を失うなどの自己肯定感を下げてしまうリスクが推測できた。

6. 総合考察及び今後の課題

360度カメラによる行動分析によって、AQ値が低い対象者にとって、集団討論は集団の中で話す模擬体験となり、エクサイズを重ねることによって自信や自己肯定感の向上が見られる有効な手段の一つであることが推測された。特に、教師からのポジティブフィードバックは、より効果を高めることも明らかとなり、会話の中でのうなずきや会話時間の上昇も見られた。同じグループ内のAQ値が高くモデルとなる協力者の行動の影響も受けている可能性も考えられる。

今後の課題は、集団討論のエクササイズにおいて、司会が設けられ、話をする機会の確保や討論の進め方の見通しを持てることの有効性について検討することである。集団討論後のポジティブフィードバックと司会を設けるなどを取り入れた実践を検討する。

なお、本研究は平成28年度～30年度科学研究費助成事業の助成を受けたものであった。

引用文献

榎本博明 (2002) 「自己概念の場依存性について」『大阪大学大学院人間科学研究紀要』28, 96-115.
 藤本 学・大坊郁夫 (2007) 「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ心理学研究』15, 347-361.
 平石賢二 (1990) 「青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) : 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討」『名古屋大学教育学部紀要』37, 217-234.
 西まゆみ・西川ひろ子・山本文枝・藤田依久子・高城佳那・西川京子・船津守久 (2019) 「大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発—教育学部の学生を対象としたグループワークの試行的実施による検討—」『児童教育研究』28, 35-42.
 宮崎英一・坂井聡・杉妻謙・境薫・島崎豊・近藤創 (2019) 「360度カメラを用いた授業指導システムの試作」『香川大学教育学部研究報告』1, 15-20.
 徳原耕亮・Billy Dawton・荒川豊・石田繁巳・曾根田悠介・松田裕貴 (2020) 「グループミーティング動画か

らの発話量抽出手法の検討」『情報処理学会第 82 回全国大会講演論文集』 1, 311-312.

山本文枝・西まゆみ・藤沢敏幸・船津守久 (2017) 「大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発 (1) - 自閉症スペクトラム指数と自己概念との関連 -」『日本心理臨床学会第 36 回大会論文集』, 453.

若林明雄, 東條吉邦, Baron-Cohen, S, Wheelwright, S. (2004) 「自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—: 高機能臨床群と健常成人による検討」『心理学研究』 75, 78-84.

山本文枝・船津守久・藤沢敏幸・西まゆみ 平成 28~30 年度科学研究費助成事業 (基盤研究(C)) 「大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発」 (課題番号 16K04410)